

二〇〇二年度の

決算報告書

について

目次

詩篇	4
冬のシチュエーション	5
取引き	6
やがて角の生える日	8
あいさつ	10
あかあかと	12
風の砂丘	14
矮猫亭句帖	16
春の部	17
夏の部	17
秋の部	18
冬の部	18

詩篇

冬のシンクロレコイルに

その言葉は

誰に届くのだろうか

「しろ」とか

「やめろ」とか

命令形で発せられる言葉

そして隊列は

どこかに行き着くのか

冬枯れのけやき並木

梢の向こうに木星が冴える

その静まりを越えて

僕には帰る場所がある

コートのポケットの中で

握りつぶす沈黙

そしていつものように

女の白い耳許に

ささやかな

シンクロレコイルを捧げるのだ

取引き

婚約記念に買った腕時計をどこかに失くしてしまった。大むくれの妻に言わせると、神さまか誰かの啓示なんだそうだ。結婚なんかなかったことになさい。返す言葉に窮していると建築業者から電話だ。もっともらしく眉をひそめて現場に出かけた。

その赤いハンドバッグは濡った盛土の上に置かれていた。ビートルにくるんで埋めてあったというが、それにして色が鮮か過ぎる。お心当たりはございませんか。施主様にも事情が判らないとなると、届けやらなにやら、ちよつと面倒なことになるかも知れません。さびた口金をそつと開くと、折り目正しくたたまれた離婚届があった。女の白い手が目に浮かぶ。苦しい想いを葬る慎重な手つき。どこか見知らぬ街で、見知らぬ女の想いが、息を吹き返すような気がした。取り壊した借家の住人が捨てたんでしょうね。管理を頼んでた不動産屋にあたってみて下さい。

帰り途、ディスカウント店で時計を買い電車に乗った。座席にからだを預けると、また女の白い手だ。向かいの席で文庫の頁をめくる指が、離婚届の女と似ている。妙に長い指。目が離せられない。白い手がしだい

に静かに光り始める。その周りはむしろほの暗く、次々と闇が吸い寄せられる。中でもひととき濃い暗みに女の長い指が沈んでゆく。少しずつ。喫水線が手首の骨の突起を洗うと、白い皮膚がくすぐったそうに粒立ち、今度はそっと指を引き上げ始める。幾度かのまばたき。ふいに赤いムコキュア。その先には、なくした時計が、だらしなくぶらさがっていた。文字盤を滑る秒針に安心した僕は胸ポケットから一枚の紙を取り出す。離婚届。その文字に女も安堵したようだ。差し出すと時計をよこしてきた。取引きを終わると僕はそれぞれ時計と離婚届とを闇に滑り込ませた。微かな落下音を聞きながら僕は小さく会釈を交した。

湿りを帯びた闇が何くわぬ顔で散り拡がってゆく。その一片が買ったばかりの時計の文字盤に落ちて、黒い針は二本ともありかが判らなくなった。

やがて角の生える日

たけちゃんはくやしかったのだ
ちよーかっちょよい消しゴムを
むりやり下手くそな字でようじられて
じじじじじすってみても
マジックだから消えねえよ

絶対になくじじじない
消しゴムだったのに
もしも、もしも失くしても
くそーっなんて言わないで
静かになみだをかみしめられたのに

オニちゅうとあだ名された
先生の文字で
たけちゃんの名まえが
にじみ
かすむ
校庭に降る雨は
先生の大好きな
アジサイやアサガオを育むのに

やっと涙のおさまったたけちゃんに

小さな角が芽を出す

三十六本目の角は

ひときわ鋭く冷たかった

あごむし

走っていないと追いつかぬるぜ
フレッドがよくそう言うってたっけ
でもいつまでも走ってるわけには
いかないだろう
いつまでも
おんなじとじろを

立ち止まる

振り返る

こつちに来るのは誰だ

身構える

耳を澄ます

明かりなんかなくても

じきに目が慣れるぞ

突然遠くで花火が鳴る

苦しそつに光って消える

痩せた肩の回こついで

小さく

微かに

たま追いついたぜ フレッド

どんな挨拶をしようか

あかあかと

朝のテレビが叫んだのです
あなたのラッキーカラーは赤って
だから今日はことごとく
血と肉とを
意識していよつと思えます
皮膚や毛や粘膜に覆われた
日の光の届かない場所で
とろりと赤く流れるもの
ぷるると赤く蠢くもの

どんな臓器にも

母の小さな刻印が感じられます

乾いたカサブタ
搔いたらだめって言われても
とめられない指の動き
の中にも赤く筋繊維が
伸びたり縮んだり
無口な骨にしがみついて
あかあかと痙攣
かがやくいたみ
ふるえ

子供たちの時間は低く飛ぶから
どんなしるべも役に立ちません

声と表情とに隠された蠕動、腫脹、排卵、痙縮、細動、敗血、滲潤、律動、発熱、硬直。いつも赤く動いています。細胞膜に閉じ困められた炎の色です。

立ち止まるとタンポポ

あしもとに

もう花も種子も尽きて

手持ちぶさた気に揺れている

ふいにしむじから

血と肉とが

溢れ出す

あかあかと

風の砂丘

もしも私に愛が
許されるなら
それは五月

古い手紙から
解き放たれた風が
子供たちを勇敢にする

坂道を駆け登り
海と出会う
春と夏との隙間に
太陽が溶け落ちる

旅立ちの準備は
終わっただろうか
もうすぐ雨がやってくる
砂浜のむこうに揺れる麦藁帽子

矮猫亭句帖

春の部

恋猫聞く不惑が二人向き合いて
花びらに降り籠められし心地して
春空の高みに機影の微かなる
おぼる月本音を言わぬ人と居り

夏の部

五月闇我れ凡なるを思い知る
梅雨憂し俺ならできると言い聞かせ
お風呂場に黴の香ほのか我家なり
蝉時雨我也歌わん歡喜の歌
涼風や鼻歌漏れる野天風呂
夕立のしずく残らず葉に抱き

秋の部

ビルの間を野分忙しく過ぎにけり
夜仕事の妻の背丸く影落し
小望月レンズのほこり払う吾子
主なき隣家に熟す柿たわわ

冬の部

幼子の額のあざや冬ざるる
雪しまく挑むが如く鴉啼く

二〇〇二年のJSTJとJSTJ

発行 二〇〇三年四月一日第一刷
著者 ならぢゆん
発行者 ならぢゆん
連絡先 j.nara@nifty.com